

平成 27 年 2 月 23 日(月) 文部科学省
不登校に関する調査研究協力者会議第二回

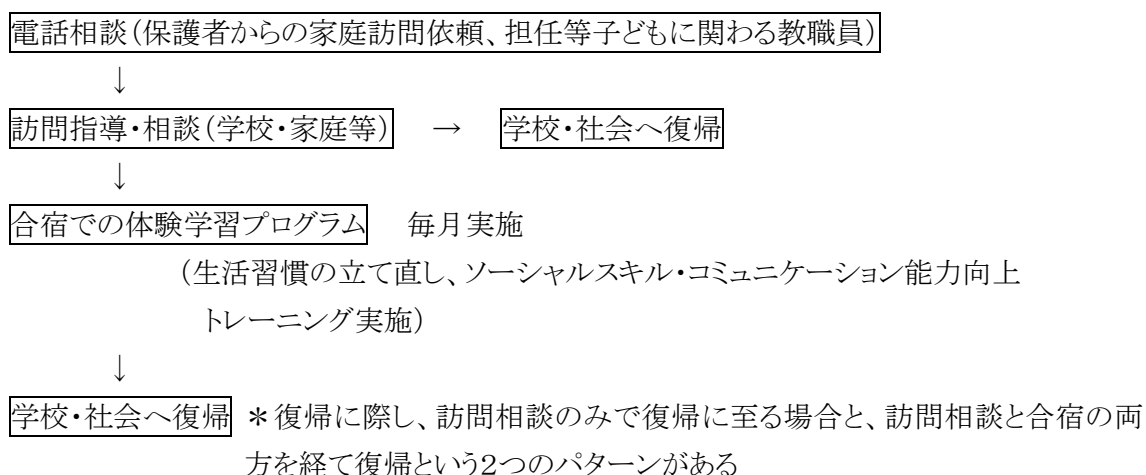
「訪問指導・相談・支援の取組について」

開善塾教育相談研究所相談部長
藤崎育子

訪問指導の目指すもの

(第Ⅰ段階)	家に引きこもっている子どもや若者が、家族以外の外部の人(相談員、担任等)に会えるよう、家庭訪問を成功させるにはどうすればよいか。
(第Ⅱ段階)	家の外に出られるようにしていくにはどのようにすればよいか。
(第Ⅲ段階)	学校や社会への復帰を具体的にどう目指していけばよいか。

学校・社会への復帰を目指して



子どもの精神衛生を考えると、欠席する期間の短縮化が望ましく、教室への完全復帰を早期に目指したい。そのためには保護者との面談を重ね、子どもの状態にあった具体的な相談・指導・支援を行うことが重要である。保護者の子どもに対する接し方に変化が表れると、家庭環境が安定し、子どもにも学校復帰への意欲が育ってくる。

また、子どもが学校復帰を果たしたものの、学級での集団生活についていけず再度不登校になる場合がある。合宿型体験活動を通して、小集団でのソーシャルスキルトレーニング等を行うことにより、不登校の子どもに不足しがちなコミュニケーション能力や社会性の育成を目指す。

中学卒業後、高校中退後にひきこもってしまった青少年にとっても、合宿で年少者の面倒を見ることは、自信回復を促し、社会復帰への意欲を育む機会となる。また実際に社会に出たときに困らないよう、コミュニケーション能力や社会性をも高める経験を積むことができる。

<学校や社会への復帰を目指した訪問相談の実際について>

- 1、子どもを知るための家庭訪問 物語り（物褒め） 養育環境
人間関係から信頼関係へ
- 2、子どもの自己評価をあげるために お手伝い 火と刃物
- 3、学校・社会への復帰を目指して 学校（担任）への訪問支援
- 4、それでも学校に戻れなかったときは

教育相談の役目 → 精神衛生をよくする

◎不登校・いじめの解決 ⇒ 鍵を握っているのは担任（研修の機会が重要）

*子どもの顔をつぶさない指導

*あきらめない！決めつけない！

*自分の表情に気をつけよう（先生・保護者の笑顔が一番）

○快 ⇒ 不快

教師と親の信頼関係があつてこそ

子どもの復元力

合宿体験活動プログラム 資料

「日常生活の定型化を練習する」ということ

不登校の子ども達のコミュニケーション能力を高めるための体験プログラムという、つい対人関係能力に拘った内容を連想しがちである。しかし、合宿体験活動の実践から得られた研究結果としては、「いかにきちんとした日常生活がこなせるようになるか」ということである。合宿生活全ての場面が、不登校の子ども達の対人関係能力、コミュニケーション能力を高めるトレーニングとなる。

*集合

初めての合宿は、家庭訪問を経て、親、あるいは相談員の車による送迎で、合宿に参加するケースが多い。

不登校が長引き、家の外に出ることが恐くなってしまった子どもに対しては、信頼関係ができた相談員が家まで迎えに行くことで、合宿に参加できる可能性が高くなる。合宿所に至る山道では車酔いする子どもが多い。最初は何度も休憩しながら、余裕のある移動を心がける。合宿を何度か体験し、慣れてくると、車酔いをしなくなる子どもが増え、自分に自信が持てるようになる。

また、合宿参加に慣れた段階で、復路に家まで送り届けるのをやめ、途中から自力で家に帰れるように変えていく。あるいは往路においても途中で待ち合わせをし、そこまでは、公共交通機関を使って、自力で来られるように変えていく。

合宿参加の経験を重ねるうちに、そこで出会った子ども同士が仲良くなる。すると、お互いに連絡を取り合うようになり、親や相談員の力を借りず、電車やバスといった公共交通機関を利用して、合宿に参加できるようになる子どもも出てくる。待ち合わせに遅刻する、電車を間違える、迷子になる等、合宿所にたどり着くまでに様々な問題が生じる。それを乗り越える過程で、子ども達は無意識のうちにコミュニケーション能力を高めていく。

合宿の集合・解散は、子どもの成長に合わせて、常に形態を変えていく。



*料理と食事

火と刃物の扱いは、手に手を取って教える。料理をつくることができるようになると子どもに自信がついてくる。他人に「美味しい」と言って食べてもらう経験から、子どもは、人の役に立つ喜びを実感する。

また保護者や担任の先生、地域の人を招いたりしての食事会で、誉められたり、感謝されたりする体験は、子どもたちが社会に出られるようになった時、未知の人と会うことへのモチベーション形成に役立つと思われる。

料理に積極的に参加する子どもは、例えば、卵一つとっても、目玉焼き、だし巻き卵、オムレツ、茶わん蒸し等、様々な調理方法に挑戦する。料理や食べることに興味関心が強い子どもは学校復帰も早い傾向がある。

一方、掃除や食器洗いは熱心にやるが、料理にはなかなか参加できず、少食の子どもは学校や社会に復帰するのに時間がかかる傾向がある。

「食べることは生きることを実感させられる。

そういった消極的な子どもも、自分の関わった料理を食べた相手から「美味しい」と褒められると変わっていく。食べることはもちろん、料理にも積極的に取り組み、工夫をするようになる。特に同年代の仲間から認められると自己評価は大幅に上がるようである。

料理と言う共同作業では、相手が何を欲しているか常に考えながら、協力することが必要であり、相手のきもちを察する練習の機会ともなる。

料理すること、食べることは一人一人の子どもの自己評価を上げるためにも、生きる力を育てるためにも体験活動で最も大事である。

*風呂

日帰り温泉を利用している。集団で行動するために、待ち合わせ時間を守る練習の機会ともなる。

温泉での裸のつき合いは最上の自己開示、解放となる。慣れてくると、背中洗いなどができるように



なる。このようなスキンシップは対人関係においても有効であり、異性との関係や性の悩みなどは、スタッフと一緒に風呂に入ることによって打ち明けやすくなる場合が多い。

まわりに迷惑をかけない、次に使う人のことを考えて行動する等、入浴マナーを教えることは子どもの社会性を育む機会となる。

* 読書

図書室の他、漫画部屋もあり、子ども一人一人が、自分の興味関心に従って読書に親しむ。お互いの感想等話し合っているうちにだんだん自己開示できる。

さいとうたかおの「サバイバル」は人気がある。生き残るというテーマは不登校の子ども心に響くようである。

これを読破した子どもは、買い出しに行くと、缶詰を買い、災害に備えることを考えるようになる。

他に人気があるのが手塚治虫のブラック・ジャック、また歴史物の三国志等長編シリーズに挑戦する子どももいる。

口数が少なく、話に加わらない子どももいるが、同じ部屋で一緒に過ごすことが人に馴れていくことにつながる。高校生が中学生の面倒を見て、相談にのるうちに、自分の抱えている問題を解決することもある。異年齢の集団生活の中で、年少の面倒を見ることから、子どもに自信が生まれる。

* カードゲーム

ウノは年齢を問わず、また大富豪、ダウト、セブンブリッジ、といったカードゲームを子どもも大人も一緒に楽しむ。人との会話を苦手とする子どもも、ゲームのルールに従い、自然と自分の意思表示をするようになる。

なかなか口がきけなかった子どもがポン、チーといっ



た言葉を自然に口にできるようになり、それをきっかけにして、料理にも積極的に参加し、学校に戻れたケースもある。

子どもだけでなく、ひきこもりの青年にとっても、トランプ遊びは、他人と過ごす初めのステップとなる。遊び方を知らない新メンバーにルールを教えたりすることによって、人に頼られる経験ができ、自信もついてくる。トランプ遊びをすることによって、参加者同士は自然と触れ合うようになる。コミュニケーションとは人と人が触れ合うということである。

無意識のうちにコミュニケーション能力を高める、あるいは回復することのできるトランプ遊びは奥が深い。

* 掃除

そうじもやり方次第で仲間と助け合う作業となる。例えば窓磨きなどは、まずはホームセンターなどで掃除用具の買い物から始める。自分の選んだ用具を使うと、掃除に取り組みやすくなる。初めは夢中になって競いあって窓を拭いたりするが、次第に窓の磨き具合を互いに確認し合うなど、仲間との共同作業となっていく。建設的仲間文化が掃除をすることによって子ども達の手でつくられる。そして、コミュニケーションが苦手な子どもも掃除をする過程で無意識のうちにその能力を高めていくのである。

合宿により、日中、することがなく昼夜逆転になりがちであった子どもたちの生活が、規則正しいリズムの生活へと変化していくことも重要である。一人一人の子どもが心身共に健康的な生活を取り戻すこと、それが非日常の日常化である。日常生活の営みの中に無意識のうちにコミュニケーション能力、対人関係能力が高まるプログラムが存在しているのである。

